

日本の民俗芸能「鷺舞」の構造人類学的研究—音楽分析を基軸として—
(研究番号：27 - 130)

国立音楽大学助手・音楽学博士 川崎 瑞穂

鷺舞とその研究史

本研究では、自身の民俗芸能研究の一環として、構造人類学と芸能史研究相互のアプローチから、東西日本の全ての「鷺舞」を総合的に研究した。日本には、鷺の作り物を身につけて舞う風流系の民俗芸能「鷺舞」が伝承されている。各地に存在する鷺舞を、行事の開催される日付順に列举してみると、次のようになる。

- ① 浅草寺の「白鷺の舞」：東京都台東区浅草（4月12日、5月15日（三社祭）、11月3日）
- ② 八幡神社（五所八幡宮）の「鷺の舞」：神奈川県足柄上郡中井町遠藤（4月29日）
- ③ 六所神社の「鷺の舞」：神奈川県中郡大磯町（5月5日（国府祭）、9月4日前後の日曜日（櫛魂祭））
- ④ 八坂神社の祇園祭（7月1 - 31日）の「鷺舞・鷺踊」：京都府京都市東区祇園町（7月16日（宵山）、17日（山鉦巡行・神幸祭）、24日（還幸祭））
- ⑤ 八坂神社の祇園祭（7月20 - 27日）の「鷺の舞」：山口県山口市上立小路（7月20日）
- ⑥ 弥栄神社の祇園祭（7月20 - 27日）の「鷺舞」：島根県鹿足郡津和野町（20日（ご神幸）、24日（中日）、27日（ご還幸））
- ⑦ 熊野神社の御宝殿田楽の「鷺舞」：福島県いわき市勿来（7月31日（宵祭）、8月1日（本祭））
- ⑧ 「飯田川鷺舞まつり」：秋田県潟上市飯田川下虻川字八ツ口（8月第1日曜日）

鷺舞は、近世以前に成立したものと、近世以降、明確な経緯によって復興・創作されたものに大別しうる。前者には、②③⑤⑥⑦の5つがある。後者には、①④⑧の3つがある。これらの鷺舞は、中世に祇園社（八坂神社）の「御霊会」で行われていたものが起源である。中世の祇園会の行列には、「傘鉦（笠鉦）」という鉦が出ていたが、この傘鉦の下では、動物など、様々

な格好をして踊る、いわゆる「拍子物（囃子物）」と呼ばれる芸能が演じられていた。傘鉦の1つである「鷺鉦（笠鷺鉦）」に付随して、白鷺の扮装で舞う「鷺舞」という芸能が存在したことはよく知られている¹。この傘鉦と鷺舞は、その後廃絶してしまっており、今日の京都の祇園祭に登場する傘鉦と鷺舞は、中世のそれがそのまま受け継がれたものではない。しかし、鷺舞は長禄3年（1459）に山口県山口市に伝わり事例⑤となり、その後、天文11年（1542）に島根県鹿足郡津和野町に伝播して事例⑥（写真1参照）となった。

写真1 津和野の鷺舞（事例⑥）（筆者撮影）



西日本の鷺舞と、東日本の鷺舞との関係は明らかになっていない。さらに、飯田川鷺舞まつり（事例⑧）など、鷺舞には近年成立した事例も存在するが、これらの研究はほとんど成されていない。例えば、鷺舞を総合的に研究したものとしては、本田安次と山路興造による調査報告書があるが²、飯田川の鷺舞はこの調査報告書が出版された1974年以降に成立した事例であるため、当然この報告書では触れられていない。民俗

¹ 中世の鷺舞についての詳細は、拙稿「川崎市の三匹獅子舞の詞章における「鷺」（『川崎研究』第54号、川崎郷土研究会、2016、印刷中）にまとめた。

² 『鷺舞神事』財団法人・観光資源保護財団、1974。

芸能研究の領域において、近年成立した鷺舞は、今まで全く研究の対象とされてこなかったのである。

研究方法・研究結果

筆者は今まで、西日本の鷺舞と、東日本の鷺舞について、それぞれ個別に研究を行ってきた。藝能史研究会 11 月例会（2012 年 11 月 9 日）において筆者は、クロード・レヴィ＝ストロースの「料理の三角形」理論を援用し、事例⑤と事例⑥について考察し、その構造を析出した（研究発表「伝統芸能の構造分析試論—「料理の三角形」理論の実践的応用—」）。その結果、事例⑤と事例⑥には、舞踊とリズムに「三項構造」が存在することが明らかになった³。本研究では、その三項構造が他の鷺舞にも存在するか否かについて、フィールド・ワークを中心とした調査・研究を行った。

研究の結果、それぞれの事例は、通時・共時間わず共通して、音楽や舞踊といった何がしかの構成要素に、「置き換え可能な三項構造」を有していることが明らかになった。本稿では以下、この「置き換え可能な三項構造」の具体例として、事例①の分析を概観する⁴。

東京都台東区浅草に伝承されている「白鷺の舞」は、「東京百年祭」（1968）を記念して創作された芸能である。『浅草寺慶安縁起絵巻』（1652）の遷座供養の祭礼行事の場面にみえる鷺舞を、浅草観光連盟が事例④・⑤・⑥の鷺舞を参考にして復興したものである。白鷺の舞の音楽には、笛・太鼓といった、他の鷺舞とも共通する楽器の他に、「双盤」（鉦）、「鉦」（シンバル状の楽器）、「板木」（木魚の祖型）、「磬」（御堂で使用する鐘）といった仏教楽器も使用されている。

祭礼当日は、舞に先行して行列が行われるが（写真 2 参照、三社祭では行列のみ行われる）、この音楽を分析すると、事例⑤と事例⑥の音楽にみられる三項構造をさらに細分化して構成されていることがわかった。

³ この研究発表の要旨は『藝能史研究』（第 200 号、藝能史研究会、pp.74 - 75、2013）に掲載されている。なおこの分析についての詳細は、拙稿「音楽と舞踊からみる中近世の鷺舞～山口・津和野の事例の比較分析を中心に～」(『リズム研究』第 16 号、日本リズム協会、pp.33 - 43、2016) にまとめた。

⁴ 以下の分析は、日本音楽学会第 66 回全国大会（2015 年 11 月 15 日）において発表したものである（研究発表「浅草寺「白鷺の舞」の構造人類学的研究—鷺舞のヴァリエーションにみる分類体系の影響—」）。

写真 2 浅草寺の白鷺の舞（事例①）（筆者撮影）



事例①では、リズムだけではなく笛の旋律も、3 つの音の繰り返しというように、三分割されている。この変換規則をまとめると表 1 のようになる。3 者は、構造人類学でいう「変換」の関係にあるといえる。

表 1 3 つの鷺舞の変換規則表（筆者作成）

	山口の鷺の舞	津和野の鷺舞	浅草の白鷺の舞		笛(連指)
			打楽器		
Section1	羯鼓	締太鼓	太鼓	双盤	○●○○○●
Section2	鷺の羽音	鉦	板木	鉦(鉢)	○○○○○●
Section3	締太鼓	小鼓	磬		●○○○○○●

この分析により、白鷺の舞の各要素は当該地域の分類体系に依拠して差異化されていることが分かった。そして、今までの鷺舞研究では明らかになっていなかった、鷺舞の変換規則の 1 つを解明することができた。この「置き換え可能な三項構造」という鷺舞の変換規則の発見は、鷺舞を体系として理解することを目指していた本研究にとって、最も重要な発見であったといえる⁵。音楽や、実際の鷺の生態、さらにそれに関する民間信仰・習俗を総合的に分析した結果、本研究では、鷺舞にまつわる未解決の問題のいくつかに解答を与えることができた。この研究は、日本における鷺舞の相互連関に関する研究の端緒であると同時に、鷺舞の通時的／共時的研究を通じて、構造人類学の民俗芸能研究への応用可能性を示すものであったといえる。

⁵ そして「置き換え可能な三項構造」という鷺舞の変換規則が、コルネリウス・アウエハントが江戸期の鯨絵の分析から析出した構造と同一であることは示唆的である (Cornelius Ouweland, *Namazue and Their Themes: An Interpretative Approach to Some Aspects of Japanese Folk Religion*, Leiden, E. J. Brill, 1964)。鯨絵など、鷺舞以外の三項構造との関係性については、今後の研究課題の 1 つである。